

「当たって砕けよ」

聖書 ヨハネの手紙一 2章1節—11節

「しかし、神の言葉を守るなら、まことにその人の内には、神の愛が実現します。」(2:5)

- 1、錯覚とか錯視ということがあります。新幹線がカーブにかかって車体が斜めになっているのに、窓からは広大な地面が斜めの坂になっているように思えるのです。中から見ているのと、外から見ているのとの違いです。ヨハネの手紙一の2章では著者は、中から神を見ている人達を批判しています。グノーシス(覚知)主義の人達のことです。彼らは「(私は)神を知っている(エグノーカ)」(4節)と言います。パウロは「神を知っている、いや、むしろ神から知られている」(ガラテヤ4:9)と、外からの見かたを同時に語っています。神を自分との関係の中で把握する事の、難しさと大事さを語っています。信仰というのは自分を神との関係の中で捉える、それゆえに人を関係(愛)そのものとして捉えるということです。関係の当事者になることなのです。
- 2、ヨハネの手紙一2:1-11はこのことをかなり丁寧に、4つの区分で言っています。
  - ① 1-2節。信仰の土台。神の知り方(弁護者の支援)。
  - ② 3-6節。信仰の目標。神を知ることの結果(掟を守ること)。
  - ③ 7-8節。信仰のカリキュラム(光の中を歩む)。
  - ④ 9-11節。信仰の実際。(兄弟を愛すること)。
- 3、まず、「神を知る」事では「知っているつもり」が打ち砕かれる経験から事柄がはじまりです。旧約の人物、アブラハム、ヤコブ、モーセ、ダビデ、サムエル、イザヤ、エレミヤ、みな然りです。彼らは、神に選ばれて、神から与えられた役目に生きたのです。主語は神です。次に、「打ち砕かれる」経験(回心)は自分本位な、傲慢な人間には難しいことです。その転換点を「罪を犯さないようになるため」(1)と言います。「罪(ハマルチア)」は「(神に向かって)的を外れ」ということです。自分本位、傲慢のことです。これを介助するのが「助け手・弁護者(バラクレートス)」です。弁護者はヨハネ福音書に出てきます。これは聖霊のことです(ヨハネ14:15以下)。2節の「贖罪論」は後世の教会の挿入です。
- 4、「神を知る」事は、認識の問題ではなく、掟を守ることだと、論を進めます。列車が軌道を、自動車が高速道路を走るように、掟は、「古く」すでにあつたものであるが、「新しく」自覚され直されるものなのです。「光の中のいる」と言っています。
- 5、今日の中心テーマは、「神の言葉を守るなら」の「なら」です。これは条件ではありません。行動の契機です。プールで底に付けている足を浮かせるようなものです。浮かせなければ泳ぎは始まりません。賀川豊彦没後50年に彼を評価した研究者は、彼をキリスト教の「オーソドクシー(正統教理)」の人ではなく「オーソプラクシー(正しい実践)」の人だと言いましたが、彼の実践はあらゆるところに今も生きています。救貧、労働、農民、協同組合、普選、平和の諸運動。
- 6、ヨハネは「兄弟を愛せ」と言いました。イエスが「隣人」を超えて「敵」というのに比べて極めて消極的です。でも、足元からやらねば次には進まないものです。「教会」はまずそこからでしょうか。とにかく「当たって砕けよ」ということから始めることが信仰者の第一歩でしょう。